

インタビュー



亀田隆明(かめだたかあき)
1952年、千葉県生まれ。順天堂大学医学部大学院卒
(医学博士)、東京医科歯科大学客員教授。
1983年より、実家の亀田総合病院に心臓血管外科医
として勤務(亀田家は江戸時代から続く医師一家)。
1985年、医療法人鉄蕉会副理事長、2008年、同理事
長に就任。

医療法人鉄蕉会(亀田グループ)
千葉県鴨川市の亀田メディカルセンター(亀田総合
病院、亀田クリニック、亀田リハビリテーション病院
他からなる)を中心に、高度先進医療を推進すると
ともに、教育や地域医療の発展、街づくりまで幅広
く活動する。

医療法人鉄蕉会
亀田総合病院理事長

亀田 隆明氏

ロシア極東のドクター、 当院で研修を

日本最大級の民間病院、対口交流に意欲

日本最大級の民間病院、医療法人鉄蕉会亀田総合病院(千葉県鴨川市)が今、ロシアの医療に視線を向けています。亀田グループは諸外国との医療交流に長い歴史を持ち、ノウハウも豊富だ。理事長の亀田隆明氏によれば、日本から距離が近い極東により大きな可能性があるという。自身のウラジオストク視察体験を含めて、対ロシア交流のアイデアを聞いた。

——今日はロシアに関するお話を伺いますが、その前に、亀田総合病院がこれまで海外交流にどのように取り組んで来ただけますか。

——海外との付き合いはアメリカ、中国から始まっています。アメリカとはもう30年ほど前から、横須賀の米軍基地からヘリで患者がここに搬送されてくるといった深い交流があり、政府要人の来日時には、大使館と連携し万一事態に備えたこともありました。

——中国とは1980年代に、医師の研修の受け入れを始めました。もともと東京大学に中国の医師が勉強に来ていたのが、担当教授の交代で受け入れが難しくなり、その際研修の一部を当院で引き受けたことから始まりました。その後いろいろな医療関係者が中国から研修に来るようになりました。その中に、その後北京大学の教授になったドクターもいて、そこに今度はこちらから、7~8人の心外チームが心臓外科の手術を教えに行きました。計5~6回行っています。執刀医と助手の若い医師、手術

室のナース、CCUナース、MEがチームを組んで行きましたが、助手として渡航した医師の中には、天皇陛下の心臓手術を担当した天野先生(※2012年に天皇の手術を執刀した天野篤・順天堂大学教授)もいました。北京以外のいくつもの地域にも乞われて行っています。そのほかにも中国の病院と提携して当院からドクターを派遣したり、病院運営を共同で行うプロジェクトも動いています。

——訪日する外国人患者の受け入れ(インバウンド)も盛んな様子ですね。

——今は週末を中心に中国人向けの人間ドックを提供しています。主に中国の富裕層が来られています。キャパシティの問題で今は年間100人ぐらいにとどまっていますが、現在施設の改修工事をしていて、6月には完成の予定です。中国の富裕層は日本の医療を深く信頼してくれており、精密検査を受けるような感覚で来日される方が多くいらっしゃいます。そのため

PET-CTを用いた総合がん検診やオプショナル検査を組み合わせるために1泊2日で1人50万円ほどになります。日本人向けの一般的な人間ドックの単価が6~7万円ですから、7~8倍の単価です。ただ検査項目が多い設定のためスケジュール管理が煩雑で、中国語対応のスタッフが受診者1人ごとに付きますから、多くの人数を受け入れるのは大変です。おかげさまでニーズはかなりあり、3ヶ月先まで予約が埋まっています。設備を拡充していく、数年のうちに年間500人ぐらい受け入れたいと思っています。

——これからはロシアの医療にも関わることになりますか。

——ロシアに関して言うと、以前からロシアに力を入れている商社に丸紅がありますが、國分文也社長は古くからの友人です。そのため医療的分野では遠隔診断システムに興味を持っておられるようで打診されました。私どもとしては画像診断などの遠隔サポートの実績がありますから可能ですが、ただインバウンドを考えるとモスクワは遠いので、ウラジオストクとかハバロフスクといったロシア極東に可能性を感じています。モスクワならば治療は当然ヨーロッパで行うでしょう。

——ロシア極東は亀田理事長ご自身が視察していますね。

——はい。医療交流で具体的に興味があるのは、実際に見学させていただいたウラジオストクの極東連邦大学の病院ですね。APEC開催に合わせて、ブーチン大統領がものすごくお金をかけてつくった施設だけあって非常に立派でした。今、日本の大企業と連携している事業があると伺いましたが、全体としてしっかり機能するところまでは至っていないかもしれません。というのは、部分部分ではいい技術があったとしても、それは医療全体のオペレーションとは別ものです。そういう意味では、私どもがお手伝いできる可能性があるのかなと感じます。

問題は言葉。英語が条件

——どのような手伝いから始めるといいでしょうか。

——まずはロシア人ドクターの研修受け入れですね。何らかのきっかけをつくって、あちら側の病院と当院との交流を通じて医師を受け入れるのが良いと思います。日本には「外国人臨床修練制度」というシステムがあります。これは外国において3年以上の診療経験がある外国人が対象です。日本に来てご自分の専門分野をもっと勉強したいとなった場合、簡単に言うと「仮免許」が出るんです。亀田総合病院の指導医を厚労省に登録すると、ロシアから来た医師がこの指導医の下で臨床研修ができるという仕組みです。

——外国人に、亀田総合病院で働くことを通して教育するというモデルですね。

——当院は、実は国内有数の医師教育機関でもあります。病院全体で医師を教育する機能を兼ね備えています。教育を受ける目的で入ってくる研修医の数は年間100人を超えます。しかし教育を終えて出ていく医師数もやはり100人を超えます。つまり、若手の優秀な医師たちがここで刺激を受け常にしのぎを削っています。先ほど話した、天皇陛下の手術をした天野先生もうち

で6年間勉強しています。実際は大学の医学部と同じようなものです。そういうサイクルの中に入ってくると、外国人医師にとってもメリットが大きいのではないかでしょうか。臨床修練制度は2年間です。私どもとしては臨床修練の間にある程度の生活費を支給します。そこに加えて、ある程度の給料を国から支給できたりすればさらにいいのではないかと思います。

——中国の例でおっしゃったのと同じ構図で、日本の医師が今度はロシアの病院に行って教えることもできますか。

——ロシアの仕組みは詳しくありませんが、中国の場合、北京だけは中国の医師免許を取らなければなりません。上海や青島で診療を行う場合は一時的なライセンスのような1年更新のものがあります。日本からロシアへ行って教えることができるかどうかはロシアの制度次第ですが、少なくとも日本への受け入れは可能だと思います。ロシア側の大学のしかるべき方と、きちんと話し合いを持てれば、まずは研修という形で交流ができるのではないかと思います。あちらは費用がほとんどかからなくて、メリットは大きいと思いますよ。しかもウラジオストクならば飛行機で2時間ぐらいでしょう。中国から受け入れると何ら変わりません。中南米とかインドなどもっと遠いところからもどんどん研修に来ていますから、それと比べればわけないですよ(笑)。例えば整形外科や循器系などピンポイントでも良いので、しっかりと形で交流し始めるのが現実的だろうと思います。

——どんなことが問題点になりそうですか。

——語学です。当院の場合中国語と英語はほぼ問題ありません。中国人の看護師も今年入ってくるだけで13人。韓国やEPAで来日したフィリピン、ベトナムなど東南アジアの方も複数働いています。彼らは、全員が本国と日本両方のダブルライセンスを持っており、臨床の現場で活躍しています。

——医師の中にも中国語ができる人が複数いますし、英語はほぼ全員大丈夫です。だけどロシア語ができる人はおそらくいないでしょう。そのため受け入れる条件として、日本語か英語のいずれかができるというのを条件にせざるを得ません。最初の交流は日本語か英語のできるドクターに、日本が得意としている分野を研修してもらうのが良いと思います。



このインタビューの続きは
「月刊ロシア通信」5月号でお読みいただけます。